

1960年以降ドイツ学界における中世初期都市＝農村 関係に関する研究

森本, 芳樹

<https://doi.org/10.15017/4491660>

出版情報：経済學研究. 50 (5), pp.45-64, 1985-03-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



1960年以降ドイツ学界における 中世初期都市=農村関係に関する研究

森 本 芳 樹

筆者と9名の若い友人たちとは、1981年から西欧中世都市=農村関係研究会を組織しているが、その活動の一部として、1960年以降ヨーロッパ学界での研究動向を明らかにすべく、以下の分担で調査を進めている。フランス学界：中世初期 佐藤彰一（愛知大学法経学部）、中世盛期・末期 山田 雅彦（九州大学文学部大学院）；ベルギー学界：中世初期 森本芳樹（九州大学経済学部）、中世盛期 斉藤 綱子（明治大学文学部）、中世末期 藤井 美男（九州大学経済学部大学院）；ドイツ学界：中世初期 森本芳樹（九州大学経済学部）、中世盛期・末期 田北 広道（福岡大学商学部）。なるだけ組織的な探索を行なって文献目録を作成し、その解説の形で特徴的な研究動向を浮彫にしようとするものであり、それぞれの担当分野で、代表的な論文を選んで翻訳することをも予定している。本稿は、この研究計画のうち、本誌前号に掲載された「1960年以降ベルギー学界における中世初期都市=農村関係に関する研究」に続いて、筆者担当の後半部分をなす。なお、本文中での文献の引用は、末尾掲載の文献目録での番号により、必要な場合、それに続けて関係する頁を示した。

はじめに ドイツにおける中世史研究で、都市=農村関係はきわめてよく取り上げられるテーマの一つであるが、これを正面から押し出した論文は、殆どすべてが中世盛期と末期に当てられており¹⁾、紀元千年ころまでの時期にある程度の紙幅を与えているのは、エ

ネンくらいである。すなわち、まず「中世における都市=農村関係の類型論に寄せて」(Ennen [21]) と題した論文では、一方では南欧的な都市による農村支配、他方ではアルプス以北での都市と農村との相対的な独自性、これら両者の対照が、古典古代末期から中世初期に全ヨーロッパ的に存在した司教による都市支配からの分岐として、中世盛期以降に明確となったと説く。ついで、ケルンを舞台とする「農村経済と都市経済との相互作用」(Ennen [22]) を検討しつつ、都市所在の教会諸組織による市外での土地所有が、中世初期においてはことに重要であったと指摘している。いずれも、中世初期に特有な問題を本格的に取り上げているわけではない。

従って本稿では、都市=農村関係に意図的には直接関わっていない仕事も含めて、ドイツ——正確には「ドイツ語を用いる」deutschsprachig——学界が中世初期の多様な分野——都市史、農村史、商業史、手工業史、教会史など——で生み出した、1960年以降の成果を広く渉猟し、都市=農村関係がどのように捉えられているかを明らかにしていきたい。もとより、多産なドイツ学界の作品を網羅的に取り上げることはできず、ことに、しばしば大冊として出版される個別地域や都市の一般的叙述は、割愛せざるをえなかったが、主要な研究動向は誤りなく追跡しえたと信ずる。

1 都市概念の柔軟化——中世初期における都市=農村関係の検出——

農業と農村とが主要な部面をなすヨーロッパ中世、ことにその度合が著しい紀元千年以前について、都市

1) それらの内容については、田北広道氏による詳細な検討が近く発表される予定である。

＝農村関係を語るとすれば、その出発点は何よりも、圧倒的に農村的な環境のもとで、都市の存在を確認することではなければならない。ただし、研究史上中世初期——少なくともその一部——を都市のない時期と考える立場は多かったし、現在でも、5世紀から10世紀までの都市の実存は、けっして自明とされているわけではないからである。例えば、社会・経済史に関する西ドイツでの標準的な概説 (Aubin-Zorn [2]; Lütge [58]) では、中世初期について都市の項目は設けられておらず、都市に関する記述は、商業地をめぐる諸問題として、商業の項目に含められている。また、中世都市の研究がきわめて盛んな東ドイツ学界²⁾でも、主要な関心は独自の階級としての市民層に向けられており、そこから、都市を発達した封建制の構成要素として、11世紀以降の現象とみなす傾向が強い (Berthold-Engel-Laube [3]; Küttler [57])。

けれども、ことに西ドイツの歴史家は、次節で明らかにするように、10世紀以前にも都市を発見しようとする努力を重ねて、多様な成果をあげているのであって、その大きな前提こそ、中世都市概念の柔軟化なのである。すなわち、都市共同体の自由と自治とを確保した法的特権を最も重要な指標として、都市と農村とを峻別しながら中世都市一般を概念規定しようとする仕方——それは第二次大戦ころまでの主流をなしていた——を排して、人間生活の諸側面での都市的諸現象のすべてに着目し、時期と地域とによって様々に異なったそれらの組み合わせを検出しようとする行き方

が、最近では前面に出てきている。この点で中世初期が正面から扱われることは多くはないが、例えば、地誌的、社会的、経済的、軍事的、法制的などの諸指標を組み合わせた類型設定によって都市を捉えるべきであるとするヤンクーンは、それによって、すでに商人と手工業者の農業世界からの分離が進行していることが確実な中世初期の「旧様式の都市」*Städte alter Art* を、中世盛期の「新様式の法的都市」*Rechtstadt neuer Art* から区別して捉えられる、と強調している (Jankuhn [43]; [44])。また、ディルヒャーは、都市法と都市共同体との確立によって特徴づけられる中世盛期の都市とは違って、「より古い都市」*ältere Stadt* の検出はまず地誌的、及び社会・経済的な側面で行なわれねばならず、法的側面では、領主的色彩の濃い諸形態に注意しなければならないと主張する (Dilcher [17])。まさにこうした方法によってのみ、『中世におけるヨーロッパ都市の前期及び初期諸形態』[42]——1970年ゲッティングン研究会³⁾報告集の表題——が、具体的に明らかにされうというわけである。

ところで、このような方法論上の変化で大きな力を振ったのは、「中心地」*Zentralort* に関する理論の適用であろう。地理学で練り上げられたこの概念を十分に吟味することは、私の力に余るが、ともかく、中世都市研究でそれが積極的な意味を持ちえたのは、個別集落そのものよりも、むしろ「中心地的諸機能」*zentralörtliche Funktionen* を見据え、一定の空間における求心的諸力の編成を眼目としており、特定地域におけるすべての都市的諸現象の検出と検討にふさわしいからだ、と思われる。デネッケは、こうした「空間・機能的考察方法」は、都市の厳密な定義から

2) 東ドイツ学界の動向は、言わば公式に、『歴史科学雑誌』上で10年ごとに取りまとめられている。1960年以降の中世史研究で都市史が占める大きな地位は、以下に明らかである。Laube, A.-Müller-Mertens, E.-Töpfer, B.: *Forschungen zur Geschichte des Mittelalters, in Historische Forschungen in der DDR 1960-1970. Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Sonderband 1970, p. 309-337*; Engel, E.-Müller-Mertens, E.-Schildhauer, J.-Töpfer, B.: *Forschungen zur Geschichte des Mittelalters, in Historische Forschungen in der DDR 1970-1980. Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Sonderband 1980, p. 46-78.*

3) 最近の西ドイツ学界で、先史時代から中世初期までの諸問題を、ことに考古学と文献学・言語学との方法を多用して検討する広場となっているのが、ゲッティングンで行なわれる「中欧及び北歐の古学委員会研究会」*Kolloquien der Kommission für die Altertumskunde Mittel- und Nord-europas* であり、本稿でもその報告集から4篇 ([2 a]; [42]; [44 a]; [46]) を取り上げた。

出発する仕方に代って登場したことを指摘している (Denecke [14]) が、後に見るように (後掲55頁)、中世初期について大きな業績をあげた ミッテラウアーも、「社会・経済史的研究課題としての中心地の問題」(Mitterauer [61]) と題する論文のうちで、次の2点を強調している。すなわち、村落と完全に発達した都市との間には、それぞれが一定の都市的機能を担う多様な集落が存在するが、中心地理論はこれらを本格的な研究対象とすることを可能にした。また、従来法的都市概念と遠隔地商業の役割との偏重によって、周辺農村から切り離して論じられる傾向が強かった都市史を、地域研究のうちに定置しえたのも、中心地理論による発想だった、というのである。もちろん、中心地理論の適用に伴う問題は多いようであるが、現在の大勢は、こうした方法を積極的に受け入れた上で、具体的な考察に進む方向にある。教会制度において発揮されるケルンの中心地機能の範囲を、様々な次元で区別してみせたエネンの論文 (Ennen [24]) がその好例であろう。

なお、東ドイツ学界も都市概念の柔軟化と無縁ではない。例えば、発生史的にも地誌的にも異なった複数部分の重合として現われる中世都市の形成は、従来のように法的都市のみを理論的枠組とするのではなく、「都市空間」*Stadtstraum* を舞台として広く考察する必要がある、とするブラシュケがそれである (Blaschke [4])。そして、前述のような一般的立場とは別に、中世初期を具体的に取り扱い必要がある場合には、やはり多様な都市現象が取り上げられる。ブライバーの注目すべき仕事は本稿の最後に取りあげる (後掲58頁) が、例えばチョコの一般的叙述を見ると、市民闘争の開始期たる11世紀に先行する時期については、「封建的都市の起源」*Anfänge des feudalen Städtewesens* と題して、農業生産力上昇に基づく商人と手工業者の自立化を理論的核心としながら、司教座都市、王宮、ブルク、市場などを扱い、かつ、都市的集落と周辺地域を繋ぐ週市を重視して、都市と農村との間の緊密な相互関係を語っているのである (Czok [13]13-26)。

2 都市史研究——統治中心地たる性格の強調——

司教座 中世初期の都市的集落として、最もよく取り上げられるのは、ローマ帝国末期から中世にかけて司教座を擁した定住地たる《*civitas*》である。司教座都市の研究がきわめて盛んなのは、それが文献史料に比較的恵まれているという事情に加えて、ことに最近の西ドイツ学界で、古典古代から西欧中世への連続の問題に関心が深く、しかも、いまや主流となっている連続説の大きな根拠が、司教座都市に関する諸史実に求められているからだと思われる。

確かに最近では、古代から中世への連続は、ローマ期都市の存続という面だけで捉えられているのではなく、従来よりは多様な水準で追究されている。コンスタンツでの研究集会 (1976-1977年) の報告集『古代末期から初期中世へ』(Ewig-Werner [32]) も、主として、地域研究の成果を集成する形で構成されており、都市そのものの連続を主要な問題としていない。けれども、司教座都市の存続が連続のきわめて重要な局面の一つと考えられていることは確実で、そのことは、最近での連続説のチャンピオンと目されるエヴィヒの論文集『古代末期とフランク期ガリア』(Ewig [31]) に収められた仕事——例えばトリアーが、「皇帝都市から司教座都市へ」変貌しながら、5世紀初頭の混乱を乗り切っていったとする小論 (Ewig [30]) や、殆どマインツ、ヴォルムス及びシュパイヤーだけに注目した「中部ラインの歴史的素描」(Id. [29])——からも見て取れる。

もちろん、司教座都市の連続について、歴史家の判断は一律ではない。『都市の前期及び初期諸形態』[42] を見ても、一方には、最近の考古学による新史料によっても、ローマ都市の連続を一般的に語ることはできず、なお個別に検討する必要があるとするシェーンベルガー (Schönberger [80]) や、トリアーについて、エヴィヒの前掲の主張にも拘らず、古代から中世への移行期全体について無差別に用いられてきた諸史料の年代順を考慮して、さらに厳密な判断を下す

必要があると言うシントラー (Schindler [74]) のような、慎重な見解がある。他方では、人口集中、手工業の存在、商業活動及び在在を越えた祭祀機能の点からして、ケルンは都市として連続しており、しかもそれがローマ帝国属州首都の典型であったとする、ドッペルフェルト (Doppelfeld [18]) の積極的な意見もある。また、『中世初期研究』誌に掲載された移行期をテーマとする2論文でも、文献史料の再検討、ことに人名と地名の新しい観点からの調査によって、ザルツブルクとその周辺について、社会的分化を内包するローマ人口の存続を主張したプリンツ (Prinz [68]) と、古代と中世の分れ目を600年ころに置き、古代都市の縮小を語るのみでその断絶を主張はしないものの、7世紀から11世紀まで続くという中世社会の発展局面を、もっぱら貴族と修道院を担い手とする農村開発として描くケラー (Keller [53]) との間には、かなりの差がある。

けれども、単行本として発表された次のような業績は、連続説を正面切って押し出している。まず、司教座都市ソワソンとその司教区を取り上げたカイザーは、フランク期には「国王＝居城都市」Königs- und Residenzstadt として存続する都市そのものも、これが中心となって編成されている司教区の行政・教会諸区域や道路網も、4世紀以降は安定した姿を示していたと説く (Kaiser [49])。また、『ガリアにおける司教支配。4世紀から7世紀までのローマ指導階層の連続に寄せて』 (Heinzelmann [39]) と題してハインツェルマンは、司教職の独占によって司教座都市を拠点としていた、高級貴族による地域支配の連続を強調する。さらに『カロリング期中部ラインにおける社会の研究』 (Staab [83]) を、ローマ的遺産が中世初期をどのように規定しているかという観点から組み立てているシュターブは、あらゆる部面で確認される古代から中世への連続は、農村よりもやはり都市——司教座及び《castrum》と呼ばれた城砦集落——で強かった、と考えている。

このような諸研究の効果もあって、最近では、中世

初期都市の主要な類型として、存続したローマ都市を考える傾向が、以前よりはずっと強くなっている。それを印象的に示すのが、新しい研究成果を常に敏感に取り入れようとすとエネンが、1970年代の中世都市の概観 (Ennen [25]) や、『ヨーロッパ都市の初期史』第3版への補遺 (Ennen [23]) では、『初期史』(初版1953年)におけるよりもずっと、連続の評価を高くしている事実であろう。また、ヤンクーンも考古学的研究成果を総括しながら、定住の継続、教会堂など公共的建造物の恒常的利用、さらにガラスと陶器について証明される生産機能の維持という3点においては、ローマ都市の連続が確実であるとしている (Jankuhn [45])。

これに対して東ドイツ学界は、連続説には批判的である。1955-1956年コンスタンツ研究集会⁴⁾に明白に示されていた西ドイツ学界の傾向を、ブルジョア的連続史観と きめつけた エンゲルマン論文 (Engelmann [20]) のように、正面切って連続説を拒否する論文は多くないが、『封建制史年報』上でソ連の歴史家シュタムは、次のように論じており、これを言わば公式の見解と考えてよい。すなわち、中世都市形成の基礎はあくまでも農民的小生産の発展による自立的手工業の成立であるが、農業生産性の低位な中世初期にはそうした事態は生じえず、奴隷制とともに古代都市が衰退してしまったこの時期は事実上都市を経験しない、というのである (Stam [84])⁵⁾。

さらに、西ドイツ学界では、古代以来の都市に対す

4) この研究集会こそ、第二次大戦前後から現われていた都市史研究の新傾向を、学界の主流として押し出す契機となったと思われるが、その報告集が Mayer, Th. (ed.): *Studien zu den Anfängen des europäischen Städtewesens*, (Vorträge und Forschungen IV), Lindau-Konstanz 1958である。

5) 1960年代後半から1970年代初頭の東ドイツ学界における、西欧封建制の起源に関する論争は、古典古代の遺産を従来よりは大きく評価する方向を強めたと考えられる。森本芳樹『西欧中世経済形成過程の諸問題』(木鐸社, 1978年), 85-87頁。けれどもこの論争では、古代都市の成行は殆ど論じられなかったようである。前注2)に引用の動向論文を参照。

る司教支配を具体的に追究した業績がいくつかあるが、いずれも、教会生活の範囲を大きく越えて世俗的諸権限を手中にした司教の、国王や有力貴族との対立と結合というきわめて政治史的な観点から、まとめられている。プリンツが5世紀から7世紀までのフランク王国における「司教による都市支配」(Prinz [69])を、貴族による地域支配の一環と考え、従ってそれがカロリング王権の最盛期には衰退するとしているのが、好例であろう。またカイザーは、司教による造幣と流通税(Kaiser [50]; [51])とを検討した後、主としてカロリング期以降の過程に関する研究を、『王権と諸侯権力との間に立つ司教支配。中世初期及び盛期西フランク＝フランス王国における司教による都市支配の研究』(Id. [52])と、きわめて政治史的な表題の大著に集成した。

王宮 戦後ドイツ学界は中世初期王権の役割を高く評価する傾向が強いが、そこから、王領地など王権の物的基盤に関する多くの研究が生み出された⁶⁾。その一環をなす王宮の研究が、都市史との密接な関連を持っているのである。これには二つの系列があり、第1はブリュールによる一連の研究で、司教座都市に置かれた宮廷——司教館を含む——を主たる対象に、メロヴィング期に重点を置いている。大著『宮廷と司教座都市』(Brühl [9])が中心となる業績であるが、それに基づいた論文の、「中世初期の都市における支配権行使の拠点」(Id. [8])及び「政治的中心としての都市」(Id. [10])という表題がはっきりと示すように、王宮と司教館の存在こそが、中世初期の都市を統治中心地として特徴づけている、との観点が貫ぬかれている。同時に、ゲルマン諸王国、ことにフランク王国の統治機構を、かなり整備された組織と考える意向も明瞭で、その中心としての首都が形成される傾向については否定的である(Id. [7c])ものの、この点をより積極的に考えるエヴィヒ(Ewig [28])と同様に、そうした国家機構の主要な拠点も都市であるはずだ、と考えているようである。

6) 森本, 前掲書, 334-343頁を参照。

第2は、マックス・プランク歴史研究所によって組織された、中世における王領地と王宮の研究で、集団研究の成果として3冊の論文集([16])が出版された後、文献史料と考古史料とを総動員して作成された王宮の総目録⁷⁾の刊行が、現在では始まっており、その他に多数の個別研究が発表されている。都市史の観点から言えば、カロリング期になって郊外市の修道院や農村の王領地に置かれることが多くなった王宮も、多くの場合商人や手工業者の集落を含んでおり、中世都市形成の起点となったという所見が、注目されねばならない。その典型的な例が、フラッハが明らかにしたアーヘンであって、そもそも「農村王宮」Landpfalzとして出発したここでは、カール大帝の主たる居城となった9世紀には、役人や貴族が、商人と手工業者、さらにはユダヤ人と混住している集落が形成されていた。これは王宮と画然と区別されることなく、全体として王権によって領主制的に統治されながらも、遠隔地商業と在地商業の場として機能する市場を持っていたという(Flach [34])。ただしこの系列の研究は、殆どすべての王宮が都市的機能を持っていた、という主張を目指しているのではなくて、一部の王宮だけが都市形成の起点となったと考え、可能なかぎりその事情を明らかにしようとしている。カロリング期の王宮所在地たるレゲンスブルクが、同時に遠隔地商業の拠点となったために、すでに9世紀からかなりの規模の「居城＝遠隔地商業都市」Residenz- und Fernhandelsstadtとなっていた、とするボーズルの研究(Bosl [7a] 97-125)はよく知られている。その他にも、例えばライン・マインツ地域では、広大な王領地の中心という役割にとどまったインゲルハイム(Schmitz [77a])や、同じく王領地中心の農村宮廷としてしばしば王国会議の開催地となったトレブル(Gockel [36])とは異なって、王宮付近に商人と手工業者が集

7) Max-Planck-Institut für Geschichte (ed.): *Die deutschen Königspfalzen. Repertorium der Pfalzen, Königshöfe und übrigen Aufenthaltsorte der Könige im deutschen Reich des Mittelalters*, Göttingen ab 1984.

住して市場が存在していたフランクフルトでは、中世盛期になってからではあるが、都市が形成された (Schalles=Fischer [71])。また、ボーデン湖地域では、ボドマンの農村王宮、ライヘナウの「修道院王宮」Klosterpfalz、コンスタンツの都市王宮があった上に、チューリッヒでは、そもそも王領地中心の農村王宮が修道院に寄進され、その真近にあった市場の関係で都市宮廷となっていった、とされている (Erdmann [27])。

ブルク 中世前期の史料に登場する《burg》は、領主によって設けられ、軍事的・政治的意味のみを担った単なる防備施設ではなく、非農業的定住地を含んだ都市の初期的形態と考えられる、こうした主張を強力に押し出したのは、周知のように1950年代のシュレジンガーであった。この「ブルク都市」Burgstadt論の補強は、その後も続けられ、1963年の論文では、ヨーロッパ諸言語での用法の考察によって、8世紀から11世紀までライン以東でのブルクは都市を意味しており、それは、イングランドやスラヴ地帯と同様に、重要な防備施設は必ず非農業的定住地と対になっていて、全体がブルクの語で呼ばれたからだ、とされている (Schlesinger [75])。

確かに、こうした見解はそのまま受け入れられたのではなく、有力な都市史家による批判があった。例えばハーゼ「防備施設としての中世都市」(Haase [37])は、商人と手工業者の定住地そのものが城壁を備え、これを農村と明示的に区別するようになる11世紀以降でなければ、都市が同時に城砦であるという事態は生じない、という論旨を展開し、領主のブルクに都市としての性格を認めていない。また、ブルクとして存在した都市がすでに特別の法を備えていた、と考えるシュレジンガーに対して、ケプラーは「中世都市法の成立に寄せて」(Köbler [54])と題した論文で、初期ブルクの本質はその保護機能にあり、都市法の成立は、都市がブルクから分離してくる1050年以降だ、と反論している。

しかしながら、ライン以東のブルク地名をとる定住

地の具体的な研究は、中世初期からこれらが都市であったとの見方を打ち出している。前掲『前期及び初期諸形態』[42]を見ても、ニッケルは、カロリング期とオットー朝期のマグデブルクを都市と前提とした上で、最近の発掘成果を報告している (Nickel [65])し、ブラブルクに関するワントの論文はさらに積極的な姿勢で、カロリング末期には住民の大部分が退去してしまうここできえ、集中した人口が、城壁で囲まれた領域の内外に分業を発達させていることが考古学的に確認できる8—9世紀については、ブルク都市と呼ぶべきだと主張している (Wand [86])。また、中世初期にもかなりの紙数を当てた、ヴェルツブルクについての個別研究を発表したシヒは、そもそもここでは、遠隔地商業の場でもある市場と皮革工業者を含む「司教座ブルク」Domburgと、国王に直属していた「市場定住地」Marktsiedlung——『日市』《mercatum cottidianum》と表現され、手工業者も居住している——との二つの核があったが、国王の司教による権利譲与で両者が合体していった、とその都市形成過程を描いている (Schich [72]7-111)。

これら定住地には司教座や王宮があって、中世初期におけるそれらの都市としての資格が確認できても、ブルクの都市的性格の論証とは直ちに連ならない悩みがある。しかし、シュレジンガーの問題提起が全体としては積極的に受け入れられていることは、中世考古学の権威 W. ヤンセンによる、「中世経済・社会史にとっての中世ブルクの意義」(Janssen [47])からも感ぜられる。ヤンセンによれば、ブルクと都市との関係は多様ではあるが、大規模なブルクの内外には必ず相当数の手工業者がいて、販売用の生産に従事しており、従って、それらは同時に商業の場ともなっている。こうした場合のブルクは、ブルク領主の支配領域に編成されている多面的な経済生活の「結晶点」Kristallisationspunkt となるが、中世初期については、それらを「前期及び初期都市的中心地」vor-und frühstädtische Zentren と考えてよいというのである。なお、カロリング期の修道院の内外には、一部は

修道士の、一部は世俗人の手工業者が多数生活していたことを強調した、シュヴィントの論文「経済機構及び手工業活動の場としてのカロリング期の修道院に寄せて」(Schwind [82]) も、ヤンセンの構想しているブルクの一つの類型を扱っている、と考えるよいであろう。

商業地 第二次大戦前後まで支配的だった中世都市成立論では、遠隔地商人の会合地がことさら重要視されていた。そして、ことにプラニッツがそれをヴィクと総称したことから、中世都市共同体形成の前段として、9—10世紀に遠隔地商人の定住地が独自に存在したとする考え方を、「ヴィクの理論」Wiktheorie とする呼び方が生じていた。この理論に対する批判には二つの流れがあり、第1は、史料で用いられるヴィク(《wik》, 《vicus》) という語が、もっぱら商人定住地を指してはいないことの論証である。クレーシエルによる著名な研究も、ヴィクを語幹として含むヴァイヒビルトが、所領の内部に領主によって創出された特権的な保有地を持つ住民の共同体を指していた、と主張して、ヴィクと呼ばれる場所が都市と農村とのいずれでもありうると考えていた(Kroeschell [55 a])。その後ケプラーは、《vicus》は特に商人定住地を指すのではなく、多数の家が集合しているながら城壁で守られていない場合の総称であり、またそれは、ゲルマン語で互いに同義である《dorf》と《wik》とのいずれとも対応しており、従って《wik》も商人定住地のみを意味することはありえない、とした(Köbler [55])。また、クレーシエルによる調査が年代的、地理的に部分的であるとして、さらに体系的な検討を加えたと自負するシュッテ『ヴィク。歴史的・言語的諸関連における一つの定住地表示』(Schütte [81]) も、これが商人定住地を意味することがないという点では一致している。すなわち、そもそも垣根を意味する語を源とする《wik》と《vicus》は、実に多様な意味を持った語を作り出したが、定住地に関しては、なんらかの形で区切られた領域という意味が強く、中世初期から盛期にかけては、領主制の展開に応じてその枠内での

様々な形態を指すことが多かった、というのである。

ヴィクの理論に対する批判の第2の流れは、9—10世紀に遠隔地商人定住地だったとされる場所について、実際には別の性格が強いことを示そうとするものである。司教座、王宮さらにブルクに隣合っていたとされる場合には、すでに見たように、これら統治中心地に対する都市的集落の独自性を小さく評価する方向で、議論が進められてきた。従ってここで特に問題になるのは、従来、あたかも遠隔地商人の会合点のみが独立に存在していたかのごとくみなされた、ことに北海やバルト海沿岸に点在する、いわゆる「商業地」Handelsplatz, Handelsemporium である。典型的なハイタブについてのシーツェルの論文(Schietzel[73])に見られるように、これらについての考古学的研究は盛んに進められているが、一般的な議論としては、この場合にもシュレジンガーの舌鋒が鋭い。すなわち、ヴィクは決して周辺と異質の存在ではなく、むしろ、ブルクに依った永続的な非農業定住地として、領主制的に編成され、地域中心地の性格を持っていた、というのである(Schlesinger [75 a])。商業地の領主制的性格が、シュレジンガーによるほど強調されることはないとしても、こうした議論の目指す方向は今日では一般的と言える。例えば、ヴィクの理論をなるだけ維持しようとする志向の明白なシュトープも、850年ころ以降のヴィクは、それ以前の遍歴商人の単純な会合地と区別された、多くの定住者を含む街路集落となり、さらに10世紀後半以降まで存続したものは、城壁の建築、在地交易を含む恒常的市場、王権による流通税賦課という変化を経験する、と指摘する(Stoob [85])。また、商業地はブルクに依らずとも中世都市に発展したと考えるエンネンも、かつては商業地の永続的定住地たる性格、ことに手工業者の比重を過小評価していたことを、認めているのである(Ennen[23])。さらにヤンクーンは、メロヴィング末期からカロリング初期にかけて遠隔地商業が発展するに伴って、その拠点が形成されるが、それらは手工業者を集住させ、周辺地域を相手とする配給・集荷機能をも持ってお

り、地域中心地たる性格を示していた。そして、これらは当初から教会制度上の中心地でもあったが、800年以降永続していく場合には、ブルクによる保護を必要とした、とまとめている (Jankuhn [45])。

× × × ×

以上のように見てくると、領主制的性格が本来明白な司教座、王宮、ブルクが都市的集落として捉えられるだけでなく、いわゆる商業地についても、領主制的側面が確認されるようになっていく。西ドイツの歴史家がこうした領主制的なものを、政治的、行政的、教会的、軍事的など、様々な語で示している点を考慮しつつ、ここでは、ドイツ学界の最近の特徴を、中世初期における都市の統治中心地たる性格の強調、というように表現しておきたい。こうした傾向を象徴的に示すのが、中心地理論を古代から中世盛期に至るバイエルンに適用したフェーンの著作であろう。すなわち、都市概念を大きく柔軟化しようとするこの理論が用いられたにも拘らず、中世初期についてそこで発見されたのは、政治的ないし教会的中心地のみであった (Fehn [33])。フェーンの場合、中世初期の市場を専ら遠隔地商業の場と考えて、これに中心地機能がないとしているのであるが、ともかく、あらゆる中心地を数え上げようとするその努力が、中世初期については世俗有力者と教会の支配拠点のみを抽出するにとどまったことが、この時期における都市的集落の共通する性格を浮彫していると言えよう。

3 農村史研究——社会・経済的發展水準の確認

「ことに考古学、歴史学及び定住地理学が、現在では中世初期を一つの研究分野としているが、それは共同的研究が行なわれたからばかりでなく、なによりも、中世と近世におけるそれ以後の發展を本質的に規定するような農耕景観の著しい転換が、まさに中世初期に行なわれたということによって、豊富な成果もたらされたからである。とりわけ顕著な定住拡張を通じてする定住地と耕地との編成替のこの局面は、方法的にも研究分野の点でも、『先史学的』研究と歴史学

的及び歴史・地理学的研究との間の境界領域に位置していたために、これまでの研究では非常に軽んじられてきたのであった」(Denecke [15 a] 418)。中欧における『鉄器時代と中世初期の耕地とその用益に関する研究』[2 a] をテーマとする、1975—1976年ゲッチンゲン研究集会における結論でのデネッケのこの発言は、新しい研究方法の開発によって、中世初期の農村を停滞的世界とする伝統的イメージから、ドイツ学界が大きく離れていることを示している。ゲッチンゲン研究集会は、これに先立つ1973—1974年度をも、『鉄器時代と中世初期の村落。定住形態——経済的機能——社会構造』[44 a] に当てているが、そこでも、中世初期農村の社会・経済的發展水準を再評価しようとする傾向が、はっきり見て取れる。こうした動向の中で、7世紀以降農村開発が進行した地域では、重量犁と三圃制度に表現される比較的高度な農業生産力を基礎として、マンス＝フーフェに拠る農民を主たる働き手とする大所領——「古典荘園制」klassische Grundherrschaft——が形成され、農村進化の担い手となるという認識が、ドイツ学界で定着している⁸⁾ (Aubin-Zorn [2] 83-108)。それは、中世初期西欧経済についての悲観的な考え方が強いフランス学界と比べるならば、きわめて特徴的なのである⁹⁾。

以下では、こうした農村史研究のうちで、都市＝農村関係にとって重要な論点をまず抽出し、ついで、手工業史からこの問題について行なわれた重要な寄与を明らかにしたい。

所領内分業と市場の必要性 中世初期の農村を現物経済の概念で捉えることは、今日全くと言ってよいほど行なわれておらず、本稿で検討した論稿のうちでは、わずかに、フェーン (Fehn [33]) にそうした仕方が見られるのみである。ことに大所領組織は、個別所領の内部にも、あるいは相互に離れた複数の所領の間にも、広く分業関係を作り出しており、しかも、そ

8) 森本, 前掲書, 247-356頁。

9) 森本芳樹「カロリング期農村世界の新しい像を求めて。9世紀末ブリュム修道院領の農民」, 本誌, 45-3, 1980, 2-5頁を見よ。

れが必然的に貨幣経済と結びついているというのが、共通の認識となっている。例えば、最近の古典荘園制研究では最大の成果であるクッヘンブッフの業績は、マンス保有農民の検討に書物の大半を当てた後に、領主役人の章に「所領の枠内での経済的特化諸機能」wirtschaftliche Sonderfunktionen im Rahmen der Domäneの項を置いて、水車番、かまど番、森番、家畜番などの職務に加えて、金属と塩の生産を扱い、さらに「交通と商業」の項を設けて、賦役労働を用いる所領間交通・運搬組織が商業と接合して、大領主の支配拠点に市場が形成されると説いている(Kuchenbuch [56] 268-305)。また、都市史家エネンと中世考古学者ヤンセンとの共著『新石器時代から産業時代前夜に至るドイツ土地制度史』には、カロリング期について、「所領の貨幣＝市場経済的諸特徴」との項(Ennen-Janssen [26] 142-144)があって、領主制内部の農業、手工業及び運搬を含む分業と、領主の営む商業を基盤として所領の余剰生産物が販売される市場が存在していたことが、強調されている。この書物は、本格的な都市の成立には領主制を超える分業と領邦君主による政策とが必要だった、という立場をとっているが、それでもこうした領主制的な「集荷市場」Sammelmarktを、中世初期の「都市的形物」stadtartige Gebildeに数えているのである。

農村手工業の広汎な存在 ローマ期都市の中世への存続の確認は、もちろん、それが都市規模の著しい縮小を伴ったことを否定するものではない。そして、この過程で多くの手工業者が農村に拡散したことも確実視されており、そこから、中世初期を対象とする手工業の研究は、農村手工業の広汎な存在の実証を通じて、農村の社会・経済的發展を確認することに導いたのである。こうした研究方向を典型的に示すのは、メロヴィング期のライン以東を舞台に、ローマ期の遺産を継承して比較的高い水準にあったとされる手工業——販売向けの生産を含む——を概観したロートの論文で、この地域の農村で分業が発展し、購買力のある顧客層が成立していることを結論している(Roth [70])。

ゲッテンゲン研究集会は1977—1980年度を『先史及び初期史時代の手工業』(Jankuhn-Janssen-Schmidt-Wiegand-Tiefenbach [46])に当てているが、そこから二つの長大な報告を取り上げてみよう。まず、メロヴィング期の文献史料を検討したクラウドによれば、当時の手工業者は身分的に多様な規定を受けていたが、しばしば考えられていたように、遍歴手工業者だったのではなく、農村所領、都市、あるいは王宮の内部に仕事場を持っていた。そして、縦横関係は主として農村に、建設業は都市に、貴金属加工は専門職たる度合いが強いに応じて都市に立地している、というように、当時の3大部門を取り上げてみても、手工業は都市と農村とに広く分布していたことが分る(Claude [12])。ついで、「農村空間の経済的要因としての中世の工業生産」(Janssen [48])を論ずるヤンセンとなると、都市と農村を峻別する従来の分業論を考古学的素材によって批判しようとの明白な意図をもって、次のように言う。中世を通じて——都市の少ない中世初期にはことさら明白に——農村における手工業中心地が存在していた。特に、自家消費用と区別された大量生産を行なう「農村工業地区」ländlicher Gewerbebezirk——工業集落ないし散居的仕事場の形をとる——の形成が、少なくとも陶器、ガラス、鉄の製造について確認できる。これらの担い手は領主層で、都市に居住する領主がその所領を所在させる周辺農村での工業家となっている。しかも、大量製品の販売のために、農村工業地区は最初から流通中心地としての都市との連繫を前提としていた、というのである。

手工業と並んで注意されるのは、農村の交通・運搬組織であるが、遠隔地との連絡に役立つ河川路を重視しすぎた従来の傾向を反省して、陸路の役割を正しく評価しようとする志向が明白であり、そのための技法を網羅的に論じたデネッケは、道路の検討を「歴史的空間研究」historische Raumforschungの一部と位置づけている(Denecke [15])。しかし、この点ではなお十分な成果が出ておらず、ただ、ローマ帝国末期の交通・運搬制度がカロリング期まで継受されたことを

強調した、シュタープの仕事が目立つ程度である。すでに触れたように、連続が何よりも都市で明白に見られるとするシュタープも、農村でも古代と中世の間に断絶はなく、ことに交通と手工業との中心地が連続の拠点となったと考えている。そして、ローマ道路とそれに沿って組織されていた宿駅制度は、フランク王国によって継承され、とくに王権を支える教会諸組織とそれらの所領を基盤として生き続けた、と主張しているのである (Staab [83]32-64)。

さらにこの箇所、前掲の『手工業』[46]に収められている長大な論文を中心とする、エクスレーによる中世初期のギルド研究を取り上げておく必要がある。フランク期の史料に《ghilde》として登場する結合体は、ゲルマン起源の仲間組織で、ことにカロリング期には商人による相互扶助団体を示している、こうした従来の考え方に対立して、文献史料を広く渉猟したエクスレーは次のように考える。すなわち、ローマ帝国末期に根ざす誓約による仲間組織は、国家の弱体化という中世初期の状況のうちで、西欧的社会結合の基礎形態として新しい意味を賦与された。そしてカロリング期には商人のみによるギルドは存在せず、むしろ、メロヴィング期の聖職者ギルドに続いて、聖職者をも含めた広い農村住民のギルドが普及していた (Oexlee [66]; [67])。こうした暫新な見解が今後どれだけ支持されることになるか、なお判断がつかねるが、ともかくそれは、ギルドの問題を遠隔地商人重視の研究史から解放しつつ、多数の手工業者を含んでいたカロリング期農村住民の間に、かなり進んだ社会的結合関係を認めようとしている点で、中世初期農村における社会・経済的水準の確認に貢献していると言えよう。

4 市場の研究——都市＝農村関係論の展開

以上のように、現在のドイツ学界では、都市史も農村史もそれぞれ固有とされてきた分野から大きく踏み出しており、上に紹介した文献の中にも、すでに都市と農村を含む地域論の構想を含んでいるものもある。

ことに、司教座都市の研究には、古代から中世に連続するのが都市だけでなく、そこを中心として統治されていた地域も、きわめて安定した制度だったとする見解 (Ewig [29]; Kaiser [49]) や、司教による都市支配が、司教を輩出させる貴族層による地域支配の一環をなしていたとの議論 (Heinzelmann [39]; Prinz [69]) がある。しかしながらこれらは、都市が持っているはずの統治領域を簡単に指示したにとどまり、都市と農村との相互関係の解明には進んでいない。都市史と農村史を連関させ、都市＝農村関係論を本格的に展開したのは、以下に見るような市場の研究だったのである。

中世都市形成要因としての市場 法制史的観点の濃かった古典的な中世都市研究でも、市場は強い関心の対象となっていた。しかしそこでは、都市法の唯一の起源の追求という視角にともすれば患いされて、中世都市形成に対する市場の役割が過大に、あるいは過小に評価される嫌いがあった。これに対して、最近のドイツ学界では、都市形成のきわめて重要な要因の一つとして、市場の役割が確認され、それと他の諸要因との関係の解明に力が注がれる中で、特に市場と統治中心地との密接な関連が強調されている。

1960年秋にコンスタンツで「中世における市場問題」をテーマとする研究集会が開かれたが、その報告集 (Schöller [78]) を見ると、市場の主要な問題を概観して序論をなしているビュトナーの論文が、なお著しく法制史的である (Büttner [11]) のに対して、すでに上述の研究方向がいくつかの論文に明白に見られる。例えば、9—10世紀スイス地域での経済中心地の増加の中で成立した12箇所の市場定住地を、そこで商人と手工業者の定住が進み、造幣所が機能し、かつ、市場と商人に関する一定の法が形成されている点から、6箇所の司教座と並ぶ都市機能の担い手と考えるアンマン (Ammann [1]) や、市場の存在形態に応じた「中心地形成現象」Zentralisierungspänomenの相異を論じたシュラー (Schöller [79]) などは、明白に中世都市形成論の一環をなす市場研究の方

向に、踏み出していたのである。さらに、同じ方向で市場研究を飛躍的に発展させたのがミッテラウアーであり、1960年代後半から発表された諸論文は、『中世における都市と市場。歴史的・中心性研究への寄与』(Mitterauer [64])として集大成された。

ミッテラウアーは、プラニッツに代表される旧来の支配的な学説が、法的都市概念への固執と遠隔地商業の過大評価によって、中世都市を周辺地域から切り離して考察し、結局はそれを封建制への異物としてしまっていた点を強く批判し、そうした仕方のイデオロギーの基礎が、19世紀以来のリベラル派的思考にあり、マルクス学派もそれを無批判に受け入れていると論じている (Id. [62])。そして、研究史の方向転換を図るための方法が、すでに指摘したように (前掲47頁)、中心地理論の活用であり、一定の時期と地域における多様な中心地諸機能の編成を問うことによって、中心地機能を持つ集落＝都市的集落の幅広いスペクトルを検出しよう、というのである (Id. [61])。ところで、ミッテラウアーにとって市場とは、その立地を地域中心地として都市にしていきわめて重要な中心地機能であるが、あくまでも経済的機能として政治的、行政的、宗教的ないしは文化的な中心地機能と結合、あるいは分離して、都市形成力を発揮する (Id. [61]; [62])。そして、中世初期における市場は殆どつねに政治的、行政的、軍事的中心地機能と同じ場所で結びついており、本稿の用語法によるならば、かかる統治的中心地機能と重なり合って始めて、一つの集落を都市に仕立て上げようと考えている。ミッテラウアーをこうした認識に導びいたのは、カロリング末期上部オーストリアでの流通状況を示す著名な史料、いわゆる「ラッフェンステッテンの流通税令」Zollordnung von Raffensteinen の分析であり、この判告から、流通税徴収所が機能している市場が必ずしも伯による王領地の統治拠点に所在し、伯領が同時に国王大権としての市場権が妥当している市場領域であったことを、読み取ったのであった (Id. [59])。ミッテラウアーはさらに進んで、ローマ期以来の司教座と城砦集落に、中世

になって成立した城砦集落を加えて、これらをブルクと総称しつつ、中世初期の市場はまさにブルクの一部分をなしていることを特質とするとして、これを「ブルク市場」Burgmarkt と呼んだ上で、次のように述べている。「ブルクと結合した商業地は、カロリング期にはフランク帝国の全領域に存在した。……これらブルクは単なる防備施設ではなく、同時に市場定住地である。ブルクとは都市的定住地に対する同時代の表示以外の何物でもない」(Id. [62] 60-61)。

このように、ミッテラウアーの議論は、すでに検討したシュレジンガーのブルク都市論 (前掲50頁) に近づいているが、そのシュレジンガーも、1970年代には市場を重視した中世都市成立論を展開している。まず「オットー朝期ザクセンにおける都市の前期諸段階」(Schlesinger [76]) では、カロリング期以降の国王による同一場所での市場権・流通税徴収権・造幣権の在有力領主への賦与政策を検討して、次のように論ずる。すなわち、こうした政策をとる国王と、特権を与えられた都市領主と、前二者の保護を受ける商人を中心とした市場区域定住者という、三つの要素から都市が形成されてくるが、中でも決定的なのが特権の免除領域としての市場の成立であり、都市領主には「市場領主」Marktherr としての性格が強い。さらに、「ドイツ都市の初期形態としての市場」(Id. [77]) という意欲的な題名を掲げた論文になると、「市場法理論」Marktrechtstheorie への回帰を意図するのではないと再三念を押しながらも、最も重要な都市形成要因として市場を押し出し、中世初期には市場と都市は区別しえないと論じている。しかも、ここで市場として理解されているのは、単なる商業取引の場ではなく、カロリング期以降の国王——後には領邦君主——が、国王大権に基づいて賦与した特権を基礎とする、永続的な市場定住地なのである。

もちろん、ミッテラウアーとシュレジンガーに代表される以上のような見解にも、様々な問題点がありうる。まず、中世初期の市場所在地がじっさいどの程度まで都市になったのか、この点に、大きな地域差があ

ったことは確実であり、最近でもジドウが南ドイツの例から問題の複雑性を論じている (Sydow [85 a])。また、市場権に関する国王文書によって実際に存在した市場のどれほどの割合を捕捉しうるのであるか、エンデマンはフランスについて、またフリックはライン・ムーズ間地域について、市場現象はこれら史料の示すところより広く、深いと指摘している (Endemann [19]; Flink [35])。さらに重要な点は、ミッテラウアーやシュレジンガーの議論に見られる、著しく領主制説的な色彩であろう。それは、かつて中世都市形成過程の中核に据えられていた遠隔地商人の役割を相対化するという功績をあげたが、その濃淡は論者によってかなり異なっている。例えば、ミッテラウアーとシュレジンガーを比べてみれば、都市共同体形成における商人の役割に言及することは、後者の方がずっと多い。「あたかもアンリ・ピレンヌがいなかったかのような」議論を拒否するシュトープとなると、少なくとも1962年には、10世紀から11世紀における非農業的定住地の進化をヴィック (シュレジンガーの疑念にも拘らず、この概念を使用すべきだと述べている) から市場へと類型化し、商人の能動性と共同体形成力を強く押し出しているのである (Stoob [85])。

しかしながら、市場を中世都市形成のきわめて重要な要因と考え、しかもそれが他の諸要因——その中で当時の封建的社会構造からして当然にも、統治的要因がとりわけ重視される——との絡み合いによってのみ中心地形成力を強く発揮するという見解が、今日のドイツ学界で主流をなしていると考えてよい。それを印象的に示すのが、まさにシュトープの指導下に最近作成された「前都市的市場発展」vorstädtische Marktentwicklung の地図において、市場が造幣権や流通税と切り離せないものとして扱われ、かつそれらが、都市形成過程を検討する際の「諸指標の束」Kriterienbündel の一部とされていることであろう (Hardt=Friederichs [38])。中世都市概念の柔軟化は、都市現象を複数指標の組み合わせによって捉える方向に導いた (前掲46頁) が、そうした方向は中世都市形成過

程の研究にも明白に現われており、市場の位置づけはその典型的な例なのである。

市場諸形態と都市形成力 最近の市場研究は、「遠隔地商業」Fernhandel の過大評価への批判を含んでおり、中世都市形成における「在地商業」Lokalhandel の役割に光を当てて、都市と周辺地域との関係を本格的に取り上げるようになってきている。けれども、最近の研究史が遠隔地商業の役割を否定してしまったのではもちろんなく、むしろ、これらの商業諸形態と結びついて、様々な市場形態が持ちうる異なった意味を解明する方向にあるのであって、この点にも十分の注意が必要である。

すでにシュラーは、1960年の研究集会 (前掲54頁) で市場諸形態を検討しながら、「遠隔地商業が都市形成と都市的成長をより強力、かつ急速に促進したことはありうるが、『近在市場』Nahmarkt の中心諸機能こそが、都市生活の最も確実で堅固な基礎をなしている」(Schöller [79] 87) という立場を示しているが、11世紀以前については、特に次のように論じている。当初は近在市場における交易が、なおブルクに依る定期市の形をとる状況があつて、そこから二つの異なった発展方向が生ずる。一方は、近在市場の一つの形態としての「領主的集荷市場」grundherrlicher Sammelmarkt の展開で、所領管理の拠点に成立した市場が、農村開発の進行に伴って中心地を形成していく。他方は、遠隔地商業からの影響による恒常的市場の成立であり、周辺地域への遠隔地商品の供給と、定住した遠隔地商人からの周辺地域への需要によって、それは中心地機能を持った近在市場としても発展していく。そして、これらの方向のうちでは後者がより強力で、大きく見れば、遠隔地商業の発達した地帯を核として都市形成が進むが、そこからの影響と領主的集荷市場の発展によって、別の地帯でも都市が成長していく、というのである (Schöller [79] 91-92)。

すでにシュラーの議論が、遠隔地商業及び在地商業の都市形成力に関して様々な立場がありうることを予想させるが、市場研究の立役者であるミッテラウアー

とシュレジンガーを見ても、後者の方が遠隔地商業の役割をより重く考えているようである。すなわち、王権による市場政策を検討の中心に据えるシュレジンガーは、本来国王大権の対象となりうるのは遠隔地商業であり、近在市場はこれと重なり合う場合にのみ特権賦与の内容となりうるとする。従って同じ市場定住地に「年市」Jahrmarkt と「週市」wöchentlicher Markt とが存在する場合には、両者が一体として文書の対象となるが、生活資料の「日市」täglich Markt は国王の市場政策からは除外されている (Schlesinger [76]; [77])。こうしてシュレジンガーは、都市の初期的形態たる市場を遠隔地商業を中心として捉え、週市もこれに引き寄せて考察しているのである。

こうしたシュレジンガーの考え方に関連して、二つの点を指摘しておきたい。第1に、中世都市形成過程をきわめて領主制的に捉えて、遠隔地商人の役割を限定しようとする立場が、必しも遠隔地商業の小さな評価とは結びつかないこと。シュレジンガーと並んでその好例がボーズルであり、バイエルンの中世都市を概観したその論文は、一般に領主が都市形成の起点にたったことを強調しながら、中世初期に存在した数少ない都市、特にレゲンスブルクの特質の一つを、遠隔地商業の拠点たる事実に求めている。ただ、遠隔地商業が領主の委託を受け、かつ自己の勘定をも行なうような非自由人によって営まれる、と考えるのである (Bosl [7b] 3-7, 11-13)。

第2に、すでに見たように (前掲56頁)、市場権に関する国王文書に主たる素材を求めるときぎりで、比較的大規模な都市的集落に関心が集中して、遠隔地商業の評価のみが高くなる危険がある。この点に留意しているフリリンクの場合には、周辺農村を足場として領主制的に組織された市場定住地と、遠隔地商人の定住によって特徴づけられる商業地とを区別し、中心地諸機能は後者においてさらに大きくなりはするが、前者がすでに大きな都市形成力を示している、と強調している (Flink [35])。ともあれ、この問題について最も

詳しい考察を行ない、都市形成力を主として近在市場に認めようとしたのが、ミッテラウアーなのである。

ミッテラウアーは、「古代中心地の後継としての年市」(Mitterauer [60]) という長大な論文を1967年に発表した後、フランスのロンバル・ジュールダンとの論争のために、「年市連続と都市形成」(Id. [63])¹⁰⁾ を1973年に執筆しているが、これらには、年市と週市との間に都市形成力において決定的な差異があるとの主張が、以下のように展開されている。古代末期から中世前期の年市は、開催の場所と期日においてきわめて安定的であるが、都市的集落とは言えない場所で行なわれていることも多い。それは、年市が祭祀機能を中心とした民衆の集会という性格を強く持っており、経済的考慮を離れた伝統的な心性によって、一定の土地と日付とに結びつけられているからである。これに対して「近在市場交易」Nahmarktverkehr の場である週市と日市は、長期的にはしばしば立地の移動を経験する。その理由は、これらが必ず地域統治中心地で行なわれており、しかもこの中心地が政治的状况に応じて移動しうるからである。従って、市場諸形態のうち都市 (= 中心地) 形成機能を持つものは、週市と日市という「恒常的市場」ständiger Markt であって、遠隔地商人の単なる会合点でありうるような「定期的市場」periodischer Markt には、それを認め難い。

こうしてミッテラウアーは、シュレジンガーとは逆に週市を日市の側に引き寄せて捉え、これら両者を含む在地市場に都市形成過程での最大の役割を与えている。そして、人里離れた場所で開催し続けられる年市は、まさに、ヴィクの理論が中世都市の起点と考えた

10) この論文は、まずフランス語による要約の形で Mitterauer, M.: La continuité des foires et la naissance des villes, in *Annales*, 1973, p. 711-734 として発表され、ドイツ語の原版は、1980年の著書 (Mitterauer [64]) で始めて公刊された。なお、ロンバル・ジュールダンの見解は、ミッテラウアーの書物に対する最近の書評論文 Lombard-Jourdan, A.: Les foires aux origines des villes, in *Francia*, 1982, p. 429-448 のうちに、まとめられている。

遠隔地商人会合地の理想型であると指摘して (Id. [60] 152), そうしたものに都市形成力を認めない自己の立場が, 従来の遠隔地商業重視の議論の対極にあることを明確にしているのである。

だからといって, 近在市場が遠隔地商業と無関係だったと, ミッテラウアーが考えているのではない。すでにカロリング末期の流通税に関する研究でも, ドナウ沿岸地域の開発の進行の中で, 伯領拠点のうちのいずれが市場として選択されるかには, 遠隔地商業からの必要が大きく作用していると指摘していた (Id. [59])。さらに地域中心地に年市と週市・日市が並存することが多いのを認め, 特に, 古代の年市が立地と日付とを固定させるほどに民衆の意識に根を下ろすためには, それがかなり長期にわたって地域中心地で行なわれる必要があったとしている (Id. [60]; [63])。そして, より一般的には, 中世初期の都市現象を地域中心地たるブルク市場と規定 (前掲55頁) した際に, 遠隔地商業の対象を狭く奢侈品に限定する傾向を批判して, かかる市場の役割に, 遠隔地商業がもたらす生活必需品——特に塩, 鉄, 家畜及び穀物——を周辺農村に配給し, また地域からの輸出品を集荷する機能を含めているのである (Id. [62])。

農村発展を基盤とする都市市場 以上のように, 最近のドイツ学界は, 中世都市形成に対する近在市場の意味を前面に押し出し, 遠隔地商業に認められる促進的役割も, 近在市場を舞台として果されると考えるようになっている。けれども, 以上に検討した業績は, どちらかといえばやはり都市史の系列に属しており, こうして都市と周辺農村との密接な関係を強調するに至ってはいるけれども, なお後者には具体的に足を踏み入れていない。中世初期について都市＝農村関係論が完結するためには, 農村について確認された社会・経済的發展水準を都市形成と結びつけることが必要だったのであり, 最後にそうした仕事を検討しよう。

西ドイツ学界で注目されるのは, 中部ライン地域を対象としたヘスの業績で, すでに1962年には, カロリ

ング期の文献史料と古銭史料を素材として, 次のように論じている。在地の造幣所で発行される銀貨による貨幣流通は, この時期に遠隔地商業としてだけでなく, 明らかに在地商業としても展開しており, 10世紀には地域的貨幣流通圏を語りうるほどであった。その中で普及してくる貨幣貢租を検討してみると, 農民による生産剰余の恒常的な販売が行なわれていることが分るが, その場となったのは, 大部分は起源をローマ期まで遡る多数の市場であった。これらは, ライン河沿岸だけでなく, 後背地にも広く分布し, 大半は市場定住地を形作っていたが, 中でも中心的な地位を占めたのは司教座都市——マインツ, ヴォルムス, シュパイヤー——の市場であった。これらに定住する商人は, 遠隔地からもたらした商品を周辺農村の市場に配給するだけでなく, 農産物剰余を集荷して, その一部——ことにワイン——を輸出していた (Hess [40])。

こうして, 9世紀ライン中流一帯は, メロヴィング期以来の発展の結果として, 広く農村を基盤とし都市を頂点とする「市場地域」Marktlandschaftを形成していた, とするヘスは, 1982年の論文では, 古銭資料のさらに系統的な整理を行いながら, こうした動向が時代とともに強化されることを確認している。すなわち, 北欧など外国で出土した貨幣に主として注目して, ライン地域の遠隔地商業での役割だけに関心を向ける従来の研究態度への反省の上に, 比較的数は少ないが在地から出土した貨幣の綿密な検討を行なった上で, 10世紀以降主要な造幣所の通貨ごとに, 造幣地を中心とする「貨幣流通領域」Geldumlaufbereichが形成されていたと主張する。そして造幣地たる都市は, 同時に重要な市場定住地でもあって, 貨幣貢租を普及させている周辺農村の中心地となっている, とするのである (Id. [41])。

東ドイツ学界で同じような業績をあげたのが, ブライバーである。その主著は7世紀に当てられていて, 農業生産の成長を基礎として, メロヴィング王国の内部で商品・貨幣流通が展開していたことを明らかにしている (Bleiber [6]) が, ここで注目すべきはむしろ

る、9世紀フランスを扱った二つの論文であろう。まず、1969年には商品・貨幣流通と領主制の形成がともに進行しているパリ地方を対象として、次のように展開している。すなわち、ここでは司教座都市を中心に多数の造幣所が機能しているが、造幣所所在地には同時に市場が存在しており、しかも、遠隔地商業だけからは説明できない週市と日市が、大きな比重を占めている。こうした市場形態からして、農民による生産剰余の販売は、広く普及している貨幣貢租の調達という目的——そのためには年市でよい——にとどまらないことが、確実である。多くの史料が、手工業者と商人がことに市場定住地に居住したことを示しており、これらと下層民によって、恒常的な農産物購買が行なわれていた。こうしてプライベートは、在地に形成され始めた分業関係こそが、商品・貨幣流通の濃密な展開を生み出し、都市的集落を支えていた、と考えているのである (Id. [5])。

さらに1982年の論文では、農村市場に注目することのなかった研究史——例外は、9—11世紀のフランスで、所領で開催される市場がかなりあったことを認めていたエンデマン (Endemann [19]) であるが、その研究はあまりにも法制史的であった——への反省の上に立ちながら、対象をロワール・ライン間地域全体に広げた議論を展開している。その出発点は、エンデマンによる作業を補完し、かつ、造幣所所在地には必ず市場があったと前提して行なわれた、市場リストの作成であり、ほぼ100箇所の市場が検出される。これらの分布は大きな地域差を示しているが、市場の少ない地帯では、それらは司教座都市に限られ、多い地帯では、農村市場の比重が高まる傾向が強い。しかも、原則として司教座での市場がメロヴィング期から存在しているのに対して、農村市場は9世紀の成立にかかっている。プライベートは、後者が所領内部にある「領主制市場」grundherrschaftlicher Markt であることに注目し、従来からの市場網をさらに濃密化したこれらこそが、封建化過程によって始めて成立したという意味で、「初期封建的」frühfeudal とするにふさわ

しいと考える。

ところでカロリング期の史料は、農民による週市訪問、特定デナリウス貨の忌避、枴の不正使用などをしばしば伝えており、所領明細帳に見られる貨幣貢租の普及を併せて考えれば、そこに遠隔地商業が到達していたことは疑いないとしても、これらの農村市場が同時に在地商業の場であったことは確実である。市場のこうした在地的性格は、農村と都市に居住する商人と手工業者からの需要によっても、確保されていた。以上のような観察に基づいてプライベートは、9世紀にはすでにかなり進んでいた封建化過程が、農業生産性の上昇を基礎とした社会的分業の展開を内包しており、それが在地的な商品・貨幣流通を濃密化して、市場を含む「初期都市的・商人＝工業経済部門」frühstädtisch kaufmännisch-gewerblicher Wirtschaftssektor を生み出していた、と結論しているのである (Id. [7])。

おわりに 第二次大戦前後までの支配的な学説が、法制史的に厳密な都市概念に固執するところから、ローマ帝政後期と中世盛期との間に、「都市のない千年」Ein Jahrtausend der Städtelosigkeit (Mitterauer [62] 67) を想定する傾向にあったのに対して、最近のドイツ学界では、中心地理論の強い影響を受けて都市概念を柔軟化し、多様な形態の都市現象を検出して、古代末期から中世初期を都市の連続した時期と考えるようになっている。また、都市形成の主体を遠隔地商人層に求めるかつて有力であった見解には、都市の統治的中心地という共通の性格を浮彫にして、きわめて領主制説的な方向から批判が加えられた。しかも、国王、教会及び世俗有力領主に認められている都市形成過程での役割は、農村に存在していた一定の社会・経済的發展を特定地点に収斂させて、地域中心地としての都市を作り出し、あるいは強化するという機能であり、それも、単に領主制的収取機構によるのではなくて、規制された商品・貨幣流通の場としての市場を組織することを通じて果される、と考えられてい

る。

こうして、現在のドイツ学界は、少なくとも中世初期に関する限り、プラニッツに代表される中世都市形成論とは全く異った方向を歩んで、言わば、領主制的世界での都市と農村との親近性を強調しているのである。本稿では、こうした動向を鮮明にするため、検討を加えた諸論稿が当然問題としている中世初期都市＝農村関係における地域差と時代差は、捨象する方向で議論を進めてきた。例えば市場研究では、ロワール・ライン間地域を対象とした業績では農村市場が重視されるのに対して、ライン以東地帯を舞台とする論文には、市場定住地そのものが都市であるとする見解が多い。また、農村の社会・経済的發展を強調する仕事は、それをカロリング期に位置づけることが多いのに対して、メロヴィング期については、司教座都市の研

究を始めとして、農村を単に都市から統治される領域として捉える傾向が見られる。すべてこうした諸問題は、ヨーロッパ中世初期の都市＝農村関係の描写が具体性を帯びるに依り、ますます強く考慮されねばならないであろう。しかしながら、そうした地域差と時代差の考慮を貫ぬいて、本稿でとりまとめた傾向が、現在のドイツ学界によって共有されていることは、紛れもない事実である。この傾向が、現在のベルギー学界にも貫徹している¹¹⁾ のを見ると、中世的・封建的環境から自由な歴史主体による中世都市の形成というユートピアが、ヨーロッパ学界ではすでに完全に過去のものとなっている、との感を深くするのである。

11) 森本芳樹「1960年以降ベルギー学界における中世初期都市＝農村関係に関する研究」本誌、50-3・4、1984、161-168頁。

文献目録

論文題名直後の()内は、初発表年次を示す。

- [1] Ammann, H.: Die frühmittelalterlichen Marktorde der Schweiz, in [78], p. 69-72.
- [2] Aubin, H. - Zorn, W.: *Handbuch der deutschen Wirtschafts- und Sozialgeschichte, I, Von der Frühzeit bis zum Ende des 18. Jahrhunderts*, Stuttgart 1971.
- [2a] Beck, H. - Denecke, D. - Jankuhn, H.: *Untersuchungen zur eisenzeitlichen und frühmittelalterlichen Flur in Mitteleuropa und ihre Nutzung*, 2 vol., Göttingen 1979-1980.
- [3] Berthold, B. - Engel, E. - Laube, A.: Die Stellung des Bürgertums in der deutschen Feudalgesellschaft bis zur Mitte des 16. Jahrhunderts, in *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 1973, p. 196-217.
- [4] Blaschke, K.: Altstadt-Neustadt-Vorstadt. Zur Typologie genetischer und topographischer Stadtgeschichtsforschung, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1970, p. 350-362.
- [5] Bleiber, W.: Grundherrschaft, Handwerk und Markt im Gebiet von Paris in der Mitte des 9. Jahrhunderts, in Otto, K. H. - Herrmann, J. (ed.): *Siedlung, Burg und Stadt. Studien zu ihren Anfängen*, Berlin 1969, p. 140-152.
- [6] Bleiber, W.: *Naturalwirtschaft und Ware-Geld-Beziehungen zwischen Somme und Loire während des 7. Jahrhunderts*, Berlin 1981.
- [7] Bleiber, W.: Grundherrschaft und Markt zwischen Loire und Rhein während des 9. Jahrhunderts. Untersuchungen zu ihrem wechselseitigen Verhältnis, in *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1982-III, p. 105-131.
- [7a] Bosl, K.: Die Sozialstruktur der mittelalterlichen Residenz- und Fernhandelsstadt Regensburg. Die Entwicklung ihres Bürgertums vom 9. bis 14. Jahrhundert, in Mayer, Th. (ed.): *Untersuchungen zur gesellschaftlichen Struktur der mittelalterlichen Städte in Europa*, (Vort. u. Forsch. XI), Stuttgart 1966, p. 93-213.
- [7b] Bosl, K.: Typen der Stadt in Bayern. Der soziale und wirtschaftliche Aufstieg der Städte und

- des Bürgertums in bayerischen Landen, in *Zeitschrift für die bayerische Landesgeschichte*, 1969, p. 1-23.
- [7c] Brühl, C. R.: Remarques sur les notions de "capitale" et de "résidence" pendant le haut Moyen Age, in *Journal des savants*, 1967 oct.-déc., p. 193-215.
- [8] Brühl, C. R.: Die Stätten der Herrschaftsausübung in der frühmittelalterlichen Stadt, in *Topografia e vita cittadina nell'alto Medioevo in Occidente*, (Settimane XXI), 2 vol., Spoleto 1974, p. 621-640.
- [9] Brühl, C. R.: *Pallatium und civitas. Studien zur Profantopographie spätantiker civitates in Gallien, Germanien und Italien*, 3 vol., Wiesbaden 1975-1980.
- [10] Brühl, C. R.: The town as a political centre: general survey, in Barlet, M. W. (ed.): *European towns. Their archaeology and early history*, London-New York-San Francisco 1977, p. 419-430.
- [11] Büttner, H.: Zum Problem des Marktes vornehmlich nach Quellen des Westens und Südwestens des Reiches bis zum Anfang des 12. Jahrhunderts, in [78], p. 44-46.
- [12] Claudé, D.: Die Handwerker der Merowingerzeit nach den erzählenden und urkundlichen Quellen, in [46] II, p. 204-266.
- [13] Czok, K.: *Die Stadt. Ihre Stellung in der deutschen Geschichte*, Leipzig-Berlin-Jena 1969.
- [14] Denecke, D.: Der geographische Stadtbegriff und die räumlich-funktionale Betrachtungsweise bei Siedlungstypen mit zentraler Bedeutung in Anwendung auf historische Siedlungsepochen, in [42] I, p. 33-55.
- [15] Denecke, D.: Methoden und Ergebnisse der historisch-geographischen und archäologischen Untersuchung und Rekonstruktion mittelalterlicher Verkehrswege, in Jankuhn, H. (ed.): *Geschichtswissenschaft und Archäologie*, (Vort. u. Forsch. XXII), Sigmaringen 1979, p. 433-483.
- [15a] Denecke, D.: Zum Stand der interdisziplinären Flurforschung, in [2a], p. 370-423.
- [16] *Deutsche Königspfalzen. Beiträge zu ihrer historischen und archäologischen Erforschung*, 3 vol., Göttingen 1963-1979.
- [17] Dilcher, G.: Rechtshistorische Aspekte des Stadtbegriffs, in [42] I, p. 12-32.
- [18] Doppelfeld, O.: Köln von der Spätantike bis zur Karolingerzeit, in [42] I, p. 110-129.
- [19] Endemann, T.: *Markturkunde und Markt in Frankreich und Burgund vom 9. bis 11. Jahrhundert*, Konstanz-Stuttgart 1964.
- [20] Engelmann, E.: Zur "Kontinuitätstheorie" in der westdeutschen stadtgeschichtlichen Forschung, in *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 1961, p. 628-644.
- [21] Ennen, E.: Zur Typologie des Stadt-Land-Verhältnisses im Mittelalter, (1963), in Id.: *Gesammelte Abhandlungen zum europäischen Städtewesen und zur rheinischen Geschichte*, Bonn 1977, p. 181-197.
- [22] Ennen, E.: Wechselwirkungen mittelalterlicher Agrarwirtschaft und Stadtwirtschaft aufgezeigt am Beispiel Kölns, in *Cultus et cognitio. Festschrift A. Gieysztor*, Warschau 1976, p. 133-143.
- [23] Ennen, E.: Bemerkungen zum gegenwärtigen Forschungsstand, (1977), in Id., *Frühgeschichte der europäischen Stadt*, 3. um einen Nachtrag erweiterte Aufl., Bonn 1981, p. 321-346.
- [24] Ennen, E.: Stufen der Zentralität im kirchlich-organisatorischen und kultischen Bereich. Eine Fallskizze—Köln, in Meynen, E. (ed.): *Zentralität als Problem der mittelalterlichen Stadtgeschichtsforschung*, Köln-Wien 1979, p. 15-21.
- [25] Ennen, E.: *Die europäische Stadt des Mittelalters*, 3. Aufl., Göttingen 1979.
- [26] Ennen, E.-Janssen, W.: *Deutsche Agrargeschichte vom Neolithikum bis zum Schwelle des Industriezeitalters*, Wiesbaden 1979.
- [27] Erdmann, W.: Zur archäologischen und baugeschichtlichen Erforschung der Pfalzen im Bodenseegebiet. Bodman, Konstanz, Rheichenau, Zürich, in [16] III, p. 136-210.

- [28] Ewig, E.: Résidence et capitale pendant le haut Moyen Age, (1963), in [31] I, p. 362-408.
- [29] Ewig, E.: Der Mittelrhein im Merowingerreich. Eine historische Skizze, (1971), in [31] I, p. 434-449.
- [30] Ewig, E.: Von der Kaiserstadt zur Bischofsstadt. Beobachtungen zur Geschichte von Trier im 5. Jahrhundert, (1972), in [31] II, p. 33-50.
- [31] Ewig, E.: *Spätantike und fränkisches Gallien*, 2 vol., Zürich-München 1976-1979.
- [32] Ewig, E.-Werner, J. (ed.): *Von der Spätantike zum frühen Mittelalter. Aktuelle Probleme in historischer und archäologischer Sicht*, (Vort. u. Forsch. XXV), Sigmaringen 1979.
- [33] Fehn, K.: *Die zentralörtlichen Funktionen früher Zentren in Altbayern. Raumbindende Umlandbeziehungen im bayerisch-österreichischen Altsiedelland von der Spätlatenezeit bis zum Ende des Hochmittelalters*, Wiesbaden 1970.
- [34] Flach, D.: *Untersuchungen zur Verfassung und Verwaltung des Aachener Reichsgutes*, Göttingen 1976.
- [35] Flink, K.: Stand und Ansätze städtischer Entwicklung zwischen Rhein und Maas in salischer Zeit, in Diestelkamp, B. (ed.): *Beiträge zum hochmittelalterlichen Städtewesens*, Köln-Wien 1982, p. 170-195.
- [36] Gockel, M.: Die Bedeutung Treburs als Pfalzort, in [16] III, p. 86-110.
- [37] Haase, C.: Die mittelalterliche Stadt als Festung. Wehrpolitisch-militärische Einflussbedingungen im Werdegang der mittelalterlichen Stadt, (1963), in Id. (ed.): *Die Stadt des Mittelalters*, I, (Wege der Forschung CCXLIII), Darmstadt 1969, p. 377-407.
- [38] Hardt-Friederichs, F.: Markt, Münze und Zoll im ostfränkischen Reich bis zum Ende der Ottonen, in *Blätter für deutsche Landesgeschichte*, 1980, p. 1-31.
- [39] Heinzelmann, M.: *Bischofsherrschaft in Gallien. Zur Kontinuität römischer Führungsschichten vom 4. bis zum 7. Jahrhundert*, München 1976.
- [40] Hess, W.: Geldwirtschaft am Mittelrhein in karolingischer Zeit, in *Blätter für deutsche Landesgeschichte*, 1962, p. 26-63.
- [41] Hess, W.: Münzstätten, Geldverkehr und Märkte am Rhein in ottonischer und salischer Zeit, in Diestelkamp, B. (ed.): *Beiträge zum hochmittelalterlichen Städtewesen*, Köln-Wien 1982, p. 111-133.
- [42] Jankuhn, H.-Schlesinger, W.-Steuer, H. (ed.): *Vor- und Frühformen der europäischen Stadt im Mittelalter*, 2 vol., 2. Aufl., Göttingen 1975.
- [43] Jankuhn, H.: Einführung, in [42] I, p. 7-11.
- [44] Jankuhn, H.: Zusammenfassende Schlussbemerkungen, in [42] II, p. 305-322.
- [44a] Jankuhn, H.-Schutzeichel, R.-Schwind, F.: *Das Dorf der Eisenzeit und des frühen Mittelalters. Siedlungsform—Wirtschaftliche Funktion—Soziale Struktur*, Göttingen 1977.
- [45] Jankuhn, H.: Vor- und Frühformen der Stadt in archäologischen Sicht, in Jankuhn, H. (ed.): *Geschichtswissenschaft und Archäologie*, (Vort. u. Forsch. XXII), Sigmaringen 1979, p. 241-270.
- [46] Jankuhn, H.-Janssen, W.-Schmidt=Wiegand, R.-Tiefenbach, H. (ed.): *Das Handwerk in vor- und frühgeschichtlicher Zeit*, I, *Historische und rechtshistorische Beiträge und Untersuchungen zur Frühgeschichte der Gilde*; II, *Archäologische und philologische Beiträge*, Göttingen 1981-1983.
- [47] Janssen, W.: Die Bedeutung der mittelalterlichen Burg für die Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Mittelalters, in [46] II, p. 261-316.
- [48] Janssen, W.: Gewerbliche Produktion des Mittelalters als Wirtschaftsfaktor im ländlichen Raum, in [46] II, p. 317-394.
- [49] Kaiser, R.: *Untersuchungen zur Geschichte der civitas und Diözese Soissons in römischer und merowingischer Zeit*, Bonn 1973.

- [50] Kaiser, R.: Münzprivilegien und bischöfliche Münzprägung in Frankreich, Deutschland und Burgund im 9.-12. Jahrhundert, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1976, p. 289-338.
- [51] Kaiser, R.: *Teloneum episcopi. Du tonlieu royal au tonlieu épiscopal dans les civitates de la Gaule (VIe-XIIe s.)*, in Paravicini, W.-Werner, K. F. (ed.): *Histoire comparée de l'administration (VIe-XIIe siècles)*, (Francia Beihefte 9), München 1980, p. 466-485.
- [52] Kaiser, R.: *Bischofsherrschaft zwischen Königtum und Fürstenmacht. Studien zur bischöflichen Stadtherrschaft im westfränkischen-französischen Reich im frühen und hohen Mittelalter*, Bonn 1981.
- [53] Keller, H.: Spätantike und Frühmittelalter im Gebiet zwischen Genfer-See und Hochrhein, in *Frühmittelalterliche Studien*, 1973, p. 1-26.
- [54] Köbler, G.: Zur Entstehung des mittelalterlichen Stadtrechtes, in *Zeitschrift für Rechtsgeschichte. Germanistische Abteilung*, 1969, p. 177-198.
- [55] Köbler, G.: Civitas und vicus, burg, stat, dorf und wik, in [42] I, p. 61-76.
- [55a] Kroeschell, K.: *Weichbild. Untersuchungen zur Struktur und Entstehung der mittelalterlichen Stadtgemeinde in Westfalen*, Köln-Graz 1960.
- [56] Kuchenbuch, L.: *Bäuerliche Gesellschaft und Klosterherrschaft im 9. Jahrhundert. Studien zur Sozialstruktur der familia der Abtei Prüm*, Wiesbaden 1978.
- [57] Küttler, W.: Stadt und Bürgertum im Feudalismus. Zu theoretischen Problemen der Stadtgeschichtsforschung in der DDR, in *Jahrbuch für Geschichte des Feudalismus*, 1981, p. 75-112.
- [58] Lütge, Fr.: *Deutsche Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Ein Überblick*, 3. Aufl., Berlin-Heidelberg-New York 1966.
- [59] Mitterauer, M.: Wirtschaft und Verfassung in der Zollordnung von Raffelstetten, (1964), in [64], p. 235-263.
- [60] Mitterauer, M.: Jahrmärkte in Nachfolge antiker Zentralorte, (1967), in [64], p. 68-153.
- [61] Mitterauer, M.: Das Problem der zentralen Orte als sozial- und wirtschaftshistorische Forschungsaufgabe, (1970), in [64], p. 22-51.
- [62] Mitterauer, M.: Von der antiken zur mittelalterlichen Stadt, (1971), in [64], p. 52-67.
- [63] Mitterauer, M.: Jahrmärktekontinuität und Stadtentstehung, (1973), in [64], p. 154-191.
- [64] Mitterauer, M.: *Markt und Stadt im Mittelalter. Beiträge zur historischen Zentralitätsforschung*, Stuttgart 1980.
- [65] Nickel, E.: Magdeburg in karolingisch-ottonischer Zeit, in [42] I, p. 294-331.
- [66] Oexlee, O. G.: Gilden als soziale Gruppen in der Karolingerzeit, in [46] I, p. 248-354.
- [67] Oexlee, O. G.: *Conjuratio et gilde dans l'Antiquité et dans le haut Moyen Age. Recherches sur la continuité de la vie sociale*, in *Francia*, 1982, p. 1-19.
- [68] Prinz, F.: Salzburg zwischen Antike und Mittelalter, in *Frühmittelalterliche Studien*, 1971, p. 10-36.
- [69] Prinz, F.: Die bischöfliche Stadtherrschaft im Frankenreich vom 5. bis zum 7. Jahrhundert, in Petri, F. (ed.): *Bischofs- und Kathedralstädte des Mittelalters und der frühen Neuzeit*, Köln-Wien 1976, p. 1-26.
- [70] Roth, H.: Handel und Gewerbe vom 6. bis 8. Jahrhundert östlich Rheins. Eine Orientierungsstudie, in *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1971, p. 323-358.
- [71] Schalles=Fischer, M.: *Pfalz und Fiskus Frankfurt. Eine Untersuchung zur Verfassungsgeschichte des fränkischen-deutschen Königtums*, Göttingen 1969.
- [72] Schich, W.: *Würzburg im Mittelalter. Studien zum Verhältnis von Topographie und Bevölkerungsstruktur*, Köln-Wien 1977.

- [73] Schietzel, K.: Bemerkungen zur Erforschung der Topographie von Haithabu, in [42] II, p. 30-40.
- [74] Schindler, R.: Trier in merowingischer Zeit, in [42] I, p. 130-151.
- [75] Schlesinger, W.: Stadt und Burg im Lichte der Wortgeschichte, (1963), in Haase, C. (ed.): *Die Stadt des Mittelalters*, I, (Wege der Forschung CCXLIII), Darmstadt 1969, p. 95-121.
- [75a] Schlesinger, W.: Zur Frühgeschichte des norddeutschen Städtewesens, in *Lüneburger Blätter*, 1966, p. 5-22.
- [76] Schlesinger, W.: Vorstufen des Städtewesens im ottonischen Sachsen, in *Die Stadt in der europäischen Geschichte. Festschrift E. Ermen*, Bonn 1972, p. 234-258.
- [77] Schlesinger, W.: Der Markt als Frühform der deutschen Stadt, in [42] I, p. 262-293.
- [77a] Schmitz, H.: *Pfalz und Fiskus Ingelheim*, Marburg 1974.
- [78] Schöller, P. (ed.): Das Marktproblem im Mittelalter, in *Westfälische Forschungen*, 1962, p. 43-95.
- [79] Schöller, P.: Der Markt als Zentralisierungsphänomen. Das Grundprinzip und seine Wandlungen in Zeit und Raum, in [78], p. 85-92.
- [80] Schönberger, H.: Das Ende oder das Fortleben spätrömischer Städte an Rhein und Donau, in [42] I, p. 102-109.
- [81] Schütte, L.: *Wik. Eine Siedlungsbezeichnung in historischen und sprachlichen Bezügen*, Köln-Wien 1976.
- [82] Schwind, F.: Zu karolingerzeitlichen Klöster als Wirtschaftsorganismen und Stätten handwerklicher Tätigkeit, in Fenske, L. - Rösener, W. - Zotz, T. (ed.): *Institutionen, Kultur und Gesellschaft im Mittelalter. Festschrift J. Fleckenstein*, Sigmaringen 1984, p. 101-123.
- [83] Staab, F.: *Untersuchungen zur Gesellschaft am Mittelrhein in der Karolingerzeit*, Wiesbaden 1975.
- [84] Stam, S. M.: Die ökonomischen Grundlagen der Herausbildung und Entwicklung der mittelalterlichen Stadt im West- und Mitteleuropa, in *Jahrbuch für Geschichte des Feudalismus*, 1978, p. 73-100.
- [85] Stooß, H.: Über Zeitstufen der Marktsiedlung im 10. und 11. Jahrhundert auf sächsischem Boden, in [78], p. 73-78.
- [85a] Sydow, J.: Fragen zum Marktproblem aus süddeutscher Sicht, in Quarthal, F. - Setzler, W. (ed.): *Stadtverfassung, Verfassungsstaat, Presspolitik. Festschrift E. Naujoks*, Sigmaringen 1980, p. 35-46.
- [86] Wand, N.: "Oppidum Buraburg" — Der Beitrag der Buraberg bei Fritzlar zur frühen Stadt östlich des Rheins, in [42] I, p. 163-201.